

マルコによる福音書 10:17～22

「救われるために何をすべきか」

2025年7月6日(主の日)

藤沢北教会 長倉基

わたしたちは救われたいと願っています。眼の前の自分にとっての救いがどのようなものか、人それぞれ違うと思います。病気を直してほしい、経済的な自由がほしい、人間関係のしがらみから抜け出したい、自分に自信が持てるようになりたい。世界平和を願っている人もいるでしょう。今足りないもの欠けているもの、実現できていないもの、そういうもの・ことを求めることもまた救いを求めている、とっていいかもしれません。よりよく生きたい、よい人生を生きたい、ということが救いを求めることであり、また、救いなんていない、というのであれば、それはやはり救いが必要だ、ということになるのだと思います。

今、主イエスの前に、救いをもとめて誠実に生きてきた一人の若者が現れました。この人は、主イエスのうわさを聞いたのか、あるいは自分で話を聞き、奇跡を目にしたのか、主イエスこそ救いを永遠の命への道を知っており、その生き方を教えてくれる先生に違いない、と思いました。そして、ひざまずいてまでして尋ねたのです。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」。このあとすぐにわかりますけれど、この人は神の掟、律法を誠実に守ってきました。自分でもそう言うくらいなのですからその自負がありました。それでも、この立派な先生に教えを請わずにはおれませんでした。何かが足りない。頑張っているつもりだが、どうも永遠の命、救いの確信が持てない、そう感じていたからに違いありません。

主イエスはそこで、やや奇妙にも思える返答をなさいます。「なぜわたしを『善い』というのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない」。ぱっと聞くと主イエスのご自身が善い方ではない。神とは違う、とおっしゃっているようにも聞こえます。福音書をすべてみてみますと、主イエスと父なる神との関係は大きくって2つあることがわかります。一つは、ご自身が天の父なる神から遣わされた御子・子供であって、父の御心に従ってさまざまなことを行っているのであって、あくまでも神に仕えている、という側面。もう一つは、天の父と主イエスは一つであって、主イエスご自身に神があらわれており、父なる神の権威を与えられている側面があります。ここでは前者、あくまでも父なる神へと導くことをつとめとされている上での答えなのでしょう。「善いお方は、ただひとり、天におられる神だけだ。永遠の命をくださるのも、神以外の何者でもあられない。だから、あなたはただその神の前に立てばよいのだ」とこの人を神の前に立つようにお招きになるのです。救いを求めるわたしたち、よい人生を送りたい、永遠の命を求めるわたしたちは、結局は神の前に立たなければならない。そこにしか救いはないからです。

そこで主イエスは、この人を神の前に立たせようとして、こうおっしゃいます。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え」。これは、わたしたちキ

リスト教会も大切にしている十戒の後半部分です。ユダヤ人であれば誰もが知っている旧約聖書の言葉です。主イエスは「ここに神の御前に生きる生き方が示されている。あなたはすでに神の前に立つとはどういうことか、永遠の命への道を生きるとはどういうことか、知っているだろう」そうおっしゃったのです。そしてそのとおり、この人は、「これらのことは全部子供の時から守ってきました」と答えることができました。

わたしたちキリスト教会も十戒を大切にしています。神が、十戒をわたしたちに与えてくださったのは、善い生き方に招いてくださるためです。けれども、わたしたちにとっての十戒の意味の一つは、これはできている、これはできない、と一喜一憂したり、できていると誇ったり、できないと自分をだめなものと考えるのではなく、この神の戒めに生き切ることができないことに気づくことです。旧約の時代には人々は、確かにこの掟を破ると神の民でなくなってしまう、と考えて一生懸命忠実に守ろうとしていました。けれども、人は自力で神の掟を守ることができなかったのです。それは、表面的な部分しかみていなかったからです。わたしは殺人などしませんと言いながら、心の中で、気に入らない人を殺していた。浮気なんかするわけじゃないじゃないですか、と言いながら、心の中では人をみだらな思いでみていた。祝福されているはずの結婚をないがしろにしていたのです。そこで、わたしたちは改めて知ります。この神の掟の厳しさ、自分はこれではできませんあれはできます、などということのおこがましさを。けれども、神は守れないからといって落第点をつけるのではなく、御子、主イエス・キリストに従うことにこそ、戒めに生きる、神の愛に生きる道であることを示してくださったのです。そこで、主イエスは十戒をお捨てにはなりませんでした。わたしが来たからもう十戒はいらない、とはおっしゃらなかったのです。わたしに従うところに、十戒が示す神の御心に生きる、神の愛に生きる道が成就する。そうおっしゃったのです。ですからわたしたちが十戒を唱えるとき、いつも主イエスを見ることになります。また、その逆のこともおこります。キリスト教会は主イエスが来られたからといって旧約聖書を捨てませんでした。実は、歴史上旧約聖書はもういない、と主張した人があらわれたこともあるのです。2世紀のころです。けれども、教会はその考えを受け入れませんでした。主イエスが来られたからこそ、旧約にあらわされた神がわたしたちの神であることが本当の意味でわかるのだ、と考えました。旧約で示された神と主イエスが示された神は同じ神であり、主イエスを通して始めてわたしたちは旧約に示されている神をまことの父なる神として知ることができるのです。

ですから、主イエスはここで十戒はいらないとはおっしゃいませんでした。それどころか、十戒の上にさらに必要なものがあるとおっしゃったのです。「あなたには、欠けているものがある」。つまり「十戒をわたしは守っています」というのではまだ足りないものがある、そうおっしゃったのです。それは、今お話ししたように、主イエス・キリストです。主イエスに従うこと、それなしにはいくら十戒を守っていると主張できても、永遠の命にはいたることはできません。その意味では、善い方は神だけだ、とおっしゃった主イエスは、ここではしかし、ご自分だけが神への道、永遠の命への道だと、ご自分が救い主

だとおっしゃっているのです。主イエスに従うとはどういうことか、それが「持っているものを売り払い、貧しい人々に施す」ことでした。

そこで勘違いしてはならないことは、主イエスは意地悪で、この人をしりぞけようとしてこうおっしゃったのではない、ということです。「こいつは十戒を全部守ってきた、なんて不遜なことを言っている。自分がいかに傲慢かおもいしらせてやろう。自分がいかに持っている富に執着しているかわからせてやろう」。主イエスはそんなことはいっさい考えておられません。「そういうことは、子供の時から守ってきました」と答えたこの人にお応えになる時主イエスは、「(この人を)見つめ、慈しんで言われた」と記されています。ここでの慈しむとは、愛すると言ってもいい言葉です。主イエスは愛のまなざしの中で、「施して、天に富を積み、そしてわたしに従いなさい」とおっしゃったのです。「わたしのもとにこそ、あなたが求めている永遠の命がある、救いがある。だからわたしのところにいらっしゃい。」愛を持ってこの人をお招きになったのです。

この次の箇所に出てきますが、当時はお金があって余裕のある生活をしている人こそ救いに近いと考えられていました。労働をしなくてすんだので、決められた時間にお祈りができ、聖書を読む時間があり、施すお金をもっていたからです。それは別の見方をすると、この人の敬虔な生活は、お金に支えられていたのです。わたしたちがドラマや映画で見ると、このような強欲な金持ちではないのです。なのに、すべてを捨てなさい、とおっしゃった。わたしたちは、この人の気持ちがよくわかります。まったく同じことを言われたら・・・この箇所を読む度に思います。主イエスがわたしに「あなたの持っている財産をすべて売り払いなさい」と言われたらどうしようか、と。毎日の生活は支えてもらっていますけれど、子供の今後の学費はどうなるのか、自分の老後はどうなるのか。ふるえる思いがします。しかし、この主イエスの言葉をまるで決まりごとのようにとらえて、自分も財産を捨てなければならないと考えたり、でも自分には無理だ、やっぱり自分はだめだなあ、と考えたりするのはおかしいことです。それは決して主イエスに従う道ではないし、神はそんなことをお求めになっていることではないでしょう。特に現代人のわたしたちにとってお金が問題なことは確かです。神を見失う最も大きな問題はお金でしょう。けれども、なおそれぞれに神の御前に立つ時にむきあわなければならないことがあると思うのです。

そう考えると、この人は財産が惜しかったから悲しみながら立ち去ったのではないかもしれないのです。自分の信仰生活自体が、正しいと思われる、神の御前に立っているつもりが、財産なしにはもうできない、そのことを悲しんだのかもしれない。そういう意味では、ひょっとするとこの人もきづいていたかもしれないのです。財産があるからといって永遠の命を得ることができない、と。だから、主イエスのところにきたのです。「永遠の命を得るにはどうすればよいのですか」。主イエスは意地悪で言ったのではない、といいましたけれど、このお金のことがこの人にとっての急所であったことは間違いありません。神の前にたつ時に、その急所が問われます。わたしたちもそれぞれ人生の急所があるのではないかと思います。それは、目を逸らしたいことかもしれません。おいそれと人

に話せることではないかもしれません。けれども、神の前にそれを隠しておくことはできません。神の前に立つ、というのは、そういうことに目をつぶって、なかったことにして立つことではないのです。

たとえば、十戒には「殺すな」という戒めがあります。主イエスはほかのところで、「兄弟に対して腹を立てることは、その人を殺したのと同じことだ」とおっしゃいました。わたしたちは嫌いな人を心の中で縁を切るようなことをします。形だけの挨拶でやりすごす関係をつくってしまう。しかし、主イエスはそのように関係を絶つことを「殺すことだ」とおっしゃるのです。「あなたは、あの人を心の中で殺すのをやめ、関係を修復しなさい。愛しなさい。そしてわたしに従いなさい」とおっしゃいます。そしてそれが、その人にとっては全財産を手放すよりもずっと難しい場合があるだろうと思います。「あなたに欠けているものがひとつある。あなたの妻を愛しなさい。そして、わたしに従いなさい」と言われなければならない人だって、きっといると思います。「あなたに欠けているものがひとつある。あなたの夫に従いなさい。夫を愛しなさい。そして、わたしイエスに従いなさい」と言われることが、その人の急所をつくことも、きっとあると思います。

わたしたちは、まさにその急所をもって神の前に立たなくてはいけない、そのためには主イエスにお願いするしかないのです。わたしにはできません。イエス様お許しください、清めてくださいと。それがわたしたちにとっての十戒の一つの意味です。旧約では、律法を表面上守ることが、つまり殺人罪をおかさないこと、浮気をしないことが神の民のしるしであったのが、主イエスがこられてからは、自分にはそれができないことを知り、だからこそ主イエスをますます深く求めるようになることが十戒の意義になりました。

福音書全体で、主イエスがお招きになったのに応えなかったのはこの場面だけだそうです。他のところでは、従いなさいとおっしゃれば、弟子となって従ったし、信じなさいとおっしゃれば信じて癒やしが与えられました。こうすれば永遠の命が得られる、救われるという主の言葉に、悲しくなってたちさってしまう。主イエスを本当には知らない私達人間の悲しい姿です。かといって、できもしないことを意気揚々と「できます。やります」と息巻くのも違うと思います。わたしたちは、「自分にはできません。自分のちからではとてもできません。主よ、お助けください。お救いください」と主に助けを求める。そうでなくては主に従うことなどできもしない者であることを認めることなのではないでしょうか。

十戒を礼拝で唱えようとしています。先週のミニセミナーで内容について話しました。今日この箇所が与えられていることをミニセミナー中にはすっかり忘れていまして、改めて聖書箇所を確認して驚きました。まさに、神の前にまことに立つためにわたしたちは礼拝で十戒を唱えようとしているのです。十戒によって、わたしたちは主イエスをもう一度思い起こすからです。わたしたちを招いてくださる愛のまなざしの中におかれていることを知るのです。主イエスよ、御言葉をお与えください。あなたなしには、歩むことができません。そういう形で主に従うわたしたちを、主イエスは必ず救ってくださいます。